日蓮大聖人御書全集

ぎょうぶのさえもんのじょうのにょうぼうごへんじ

刑部左衛門尉女房御返事

新版2070～2075

刑部左衛門尉女房御返事

弘安3年('80)10月21日　59歳　刑部左衛門尉の妻

今月飛来の雁書に云わく「この十月三日、母にて候もの十三年に相当たれり。銭二十貫文」等云々。

夫れ、外典三千余巻には忠孝の二字を骨とし、内典五千余巻には孝養を眼とせり。不孝の者をば、日月も光を惜おしみ、地神も瞋りをなすと見えて候。

ある経に云わく「六道の一切衆生、仏前に参り集まりたりしに、仏、彼らが身の上のことを一々に問い給いし中

に、仏、地神に『汝、大地より重きものありや』と問い給いしかば、地神敬んで申さく『大地より重き物候』と申す。仏の曰わく『いかに地神、偏頗をば申すぞ。この三千大千世界の建立は皆大地の上にそなわれり。いわゆる須弥山の高さは十六万八千由旬、横は三百三十六万里なり。大海は縦横八万四千由旬なり。その外の一切衆生・草木等は、皆大地の上にそなわれり。これを持てるが大地より重き物有らんや』と問い給いしかば、地神答えて云わく『仏は知ろしめしながら、人に知らせんとて問い給うか。

我、地神となること二十九劫なり。その間、大地を頂戴して候に、頸も腰も痛むことなし。虚空を東西南北へ馳走するにも重きこと候わず。ただし、不孝の者のすみ候所が、身にあまりて重く候なり。頸もいたく、腰もおれぬべく、膝もたゆく、足もひかれず、眼もくれ、魂もぬけべく候。あわれ、この人の住所の大地をばなげすてばやと思う心たびたび出来し候えば、不孝の者の住所は常に大地ゆり候なり。されば、教主釈尊の御いとこ・提婆達多と申せし人は、閻浮提第一の上臈、王種姓なり。しかれども、不孝

の人なれば、我ら彼の下の大地を持つことなくして、大地破れて無間地獄に入り給いき。我らが力及ばざる故にて候』と、かくのごとく地神こまごまと仏に申し上げ候いしかば、仏は『げにも、げにも』と合点せさせ給いき。また仏歎いて云わく『我が滅後の衆生の不孝ならんこと、提婆にも過ぎ、瞿伽利にも超えたるべし』と」等云々〈取意〉。

涅槃経に「末代悪世に不孝の者は大地微塵よりも多く、孝養の者は爪上の土よりもすくなからん」と云々。

今、日蓮案じて云わく、この経文は殊にさもやとおぼえ

候。父母の御恩は今初めて事あらたに申すべきには候わねども、母の御恩のこと、殊に心肝に染みて貴くおぼえ候。飛ぶ鳥の子をやしない、地を走る獣の子にせめられ候こと、目もあてられず、魂もきえぬべくおぼえ候。

それにつきても、母の御恩忘れがたし。胎内に九月の間の苦しみ、腹は鼓をはれるがごとく、頸は針をさげたるがごとし。気は出ずるより外に入ることなく、色は枯れたる草のごとし。臥せば腹もさけぬべし。坐すれば五体やすからず。かくのごとくして産も既に近づきて、腰はやぶれてきれぬべ

く、眼はぬけて天に昇るかとおぼゆ。かかる敵をうみ落としなば、大地にもふみつけ、腹をもさきて捨つべきぞかし。さはなくして、我が苦を忍んで急ぎいだきあげて血をねぶり、不浄をすすぎて胸にかきつけ、懐きかかえて三箇年が間慇懃に養う。母の乳をのむこと、一百八十斛三升五合なり。この乳のあたいは、一合なりとも三千大千世界にかえぬべし。されば、乳一升のあたいを撿えて候えば、米に当つれば一万一千八百五十斛五升、稲には二万一千七百束に余り、布には三千三百七十段なり。いかにいわんや、

まなこ　抜　てん　のぼ　覚　かたき　産　お
だいち　踏　付　はら　割　す
わ　く　しの　いそ　抱　上　ち　舐
ふじょう　濯　むね　掻　付　いだ　抱　さんかねん　あいだ
おんごん　やしな　はは　ちち　飲　いっぴゃくはちじゅうこくさんしょうごごう
ちち　価　いちごう　さんぜんだいせんせかい　替
ちちいっしょう　かんが　そうら　こめ　あ
いちまんいっせんはっぴゃくごじゅうこくごしょう　いね　にまんいっせんしちひゃくそく　あま
ぬの　さんぜんさんびゃくしちじゅうたん

一百八十斛三升五合のあたいをや。

他人の物は、銭の一文・米一合なりとも盗みぬれば、ろう牢のすもりとなり候ぞかし。しかるを、親は十人の子をば養えども、子は一人の母を養うことなし。あたたかなる温夫をば懐いて臥せども、こごえたる母の凍足をあたたむる女房はなし。

給孤独園の金鳥は子のために火に入り、憍尸迦夫人は夫のために父を殺す。仏の云わく「父母は常に子を念えども、子は父母を念わず」等云々。影堅王の云わく「父は子

を念うといえども、子は父を念わず」等これなり。たとい
また、今生には父母に孝養をいたすようなれども、後生の
ゆくえまで問う人はなし。母の生きておわせしには、心に
は思わねども、一月に一度、一年に一度は問いしかども、死
し給いてより後は、初七日より二七日、乃至第三年までは、
人目のことなれば形のごとく問い訪い候えども、十三年、
四千余日が間のほどは、かきたえ、問う人はなし。生きて
おわせし時は一日片時のわかれをば千万日とこそ思われし
かども、十三年、四千余日のほどは、つやつやおとずれな

し。いかにきかまほしくましますらん。

夫れ、外典の孝経には、ただ今生の孝のみをおしえて後生のゆくえをしらず。身の病をいやして心の歎きをやめざるがごとし。内典五千余巻には、人天・二乗の道に入れて、いまだ仏道へ引導することなし。

夫れ、目連尊者の父をば吉占師子、母をば青提女と申せしなり。母、死して後、餓鬼道に堕ちたり。しかれども、凡夫の間は知ることなし。証果の二乗となりて天眼を開いて見しかば、母餓鬼道に堕ちたりき。あらあさましやというば

かりもなし。餓鬼道に行って飯をまいらせしかば、わずかに口に入るるかと見えしが、飯変じて炎となり、口は鼎かなえのごとく、飯は炭をおこせるがごとし。身は灯炬のごとくもえあがりしかば、神通を現じて水を出だして消すところに、水変じて炎となり、いよいよ火炎のごとくもえあがる。目連、自力には叶わざるあいだ、仏の御前に走り参り申してありしかば、十方の聖僧を供養し、その生飯を取って、わずかに母の餓鬼道の苦をば救い給えるばかりなり。

釈迦仏は、御誕生の後、七日と申せしに、母の摩耶夫人におくれまいらせましまし き。凡夫にてわたらせ給えば、母の生処を知ろしめすことなし。三十の御年に仏にならせ給いて、父・浄飯王を現身に教化して、証果の羅漢となし給う。母の御ためには忉利天に昇り給いて摩耶経を説き給いて、父母を阿羅漢となしまいらせ給いぬ。これらをば、爾前の経々の人々は孝養の二乗、孝養の仏とこそ思い候えども、立ち還って見候えば、不孝の声聞、不孝の仏なり。目連尊者程の聖人が母を成仏の道に入れ給わず、

釈迦仏程の大聖の、父母を二乗の道に入れ奉って永不成仏の歎きを深くなさせまいらせ給いしをば、孝養とや申すべき、不孝とや云うべき。しかるに、浄名居士、目連を毀って云わく「六師外道が弟子なり」等云々。仏、自身を責めて云わく「我は則ち慳貪に堕せん。この事は不可となす」等云々。しかれば、目連は知らざれば科浅くもやあるらん。仏は法華経を知ろしめしながら、生きておわする父に惜しみ、死してまします母に再び値い奉りて説かせ給わざりしかば、大慳貪の人をば、これより外に尋ぬべか

らず。

つらつら事の心を案ずるに、仏は二百五十戒をも破り、十重禁戒をも犯し給う者なり。仏、法華経を説かせ給わずば、十方の一切衆生を不孝に堕とし給う大科まぬかれがたし。故に、天台大師、このことを宣べて云わく「過は則ち仏に属す」云々。ある人云わく「これ十方三世の仏の本誓に違背し、衆生を欺誑すること有り」等云々。

夫れ、四十余年の大小・顕密の一切経ならびに真言・華厳・三論・法相・倶舎・成実・律・浄土・禅宗等の仏・

菩薩・二乗・梵釈・日月および元祖等は、法華経に随うことなくば、いかなる孝養をなすとも、「我は則ち慳貪に堕せん」の科脱るべからず。故に、仏、本願に趣いて法華経を説き給いき。しかるに、法華経の御座には父母ましまざりしかば、親の生まれてましまし方便土と申す国へ贈り給いて候なり。その御言に云わく「しかして、彼の土において、仏の智慧を求め、この経を聞くことを得ん」等云々。この経文は、智者ならん人々は心をとどむべし、教主釈尊の父母の御ために説かせ給いて候経文なり。

この法門は、ただ天台大師と申せし人ばかりこそ知っておわし候いけれ。その外の諸宗の人々知らざることなり。日蓮が心中に第一と思う法門なり。

父母に御孝養の意あらん人々は、法華経を贈り給うべし。教主釈尊の父母の御孝養には、法華経を贈り給いて候。

日蓮が母存生しておわせしに、仰せ候いしことをもあまりにそむきまいらせて候いしかば、今おくれまいらせて候があながちにくやしく覚えて候えば、一代聖教を撿えて母の孝養を仕らんと存じ候あいだ、母の御訪

い申させ給う人々をば我が身のように思いまいらせ候
えば、あまりにうれしく思いまいらせ候あいだ、あらあら
かきつけて申し候なり。定めて過去聖霊も、たちまち
に六道の垢穢を離れて霊山浄土へ御参り候らん。
この法門を、知識に値わせ給いて、度々きかせ給うべし。
日本国に知る人すくなき法門にて候ぞ。くわしくはまた
また申すべく候。恐々謹言。

十月二十一日　　日蓮　花押

尾張刑部左衛門尉殿　女房御返事